

## 『疫病の年の記録』

塩谷 清人

ダニエル・デフォアの *A Journal of the Plague Year* (一七二二年三月) は時宜を得た作品であった。その二年まえの一七二〇年、マルセイユでペスト(疫病)が発生してイギリスでもその伝染が警戒された。また話題になり、新聞や雑誌、あるいは小冊子はしばしばペストを取り上げた。デフォーはもともと危機的状况における人間の行動につよい関心を持つ作家であったから、さっそく同年の一〇月には彼が関係していた『アップルビー』(the *Applebee's Journal*) という週刊誌にマルセイユ通信という形で、その状況を生々しく伝えた。それ以後もしばしばマルセイユのペストについて言及している。同じ年にはイギリス国内で「南海泡沫事件」がおきて、株が大暴落し多くの自殺者まで出した。このような不安定な社会状況で『疫病の年の記録』は書かれた。

デフォーはこの作品の一ヶ月前(一七二二年二月)に『疫病へのしかるべき精神のおよび肉体的備え』(*Due Preparations for the Plague, as well for Souls as Body*) という本を出した。これは現実的なペスト対応策、さらにはキリスト教徒として死を迎えるための心の準備を書いたものである。『モル・フランダーズ』、『ジャック大佐』など大作を書いた同じ一七二二年にペスト関係の作品が二つ書かれたことに、デフォーのこだわり

が見えてくる。

『疫病の年の記録』は単なる個人的記録、体験記ではない。ペストを生き延びた男の記録であるが、さまざまな資料を駆使し、当時の人々の考え方、信仰、行政当局の対応、そしてペストという病そのものの情報が書かれている。実際主人公の体験自体は全体の分量では半分にも満たない。そのことは題扉に書かれたタイトルでも確認できる。タイトルは「一六六五年の大災禍（*GREAT VISITATION*）」にロンドンで起こった驚くべき公的、私的事件の観察記、記録である」（傍線は引用者）と続く。

ペストなどの伝染病は英語で *visit*（襲つ）、*visitation*（見舞つ）や *visitation*（天罰、災禍）と言うように、外部から「訪れる」。ペストはしばしばイギリスに被害をもたらしたが、一六六五年の大流行は最悪の部類に入る。そこでその翌年の「大火」（*the Great Fire*）が固有名詞化していると同様に、十八世紀前半の人々、とくにそれを体験した老人の脳裏には六〇年近く経った一七二二年時点でも焼きついていた。「疫病の年」といえばこの年を指していた。外部からの伝染病の侵入に対しては、拳国的な防衛、組織的な感染防止体制が必要になる。個々人はもちろん公的な防衛が必要になってくる。ジャーナリストであったデフォーの『疫病の年の記録』が公的記録の性格を持つてくるのは当然である。

『疫病の年の記録』は出版後長い間、本物の歴史記録として受容されていた。再度題扉を見ると、これは「ロンドンに「ペスト流行時に」いつつけた一市民が書いた」作品とある。体験記という触れ込みである。ところが作者がデフォーであることが知られるようになった一七七〇年代からは、一転してフィクションとして見られるようになった。それはデフォーという作家のイメージが影響している。『ロビンソン・クルーソー』

のように本物と見せて作り物を書くのがデフォーだというイメージが、十八世紀後半から一九世紀にかけて定着していた。当時の言い方で「ロマンス」「フィクション」と見られていた。ウォルター・スコットの評価がその典型で、彼は『疫病の年の記録』を「ロマンスとヒストリーのあいだを浮遊する」作品と見た<sup>2)</sup>。当時「ヒストリー」のジャンルはこのようなものも含んでいた<sup>3)</sup>。

『疫病の年の記録』はヒストリーかフィクションか？ この作品の受容史はある意味ではデフォー受容史でもある。二〇世紀に入ってもこの論争は一向に決着がつかなかった。要約すると、W・ニコルソン(Nicholson)は一九一九年にこの作品は歴史記録に基づく書き、その内容はすべて正確だとした。二〇年代にA・W・セコード(Second)やW・ベル(Bell)は逆にフィクション、特に資料の出典がはつきりしないところはフィクションだとみなした。その詳細はここでは省くが、その頃から一挙に論争が起こった。現在の主流になっている意見は『疫病の年の記録』は誤りも多少あるが、多くの記載された事実はすでに出された資料をもとにしているというF・バステイアン(Bastian)の考えである。この論争が起こる一番の理由はH・Fという主人公であり、語り手の存在である。十九世紀の批評家はこの作品をフィクションと考えたのは、H・Fを實在人物とは取らずに架空の人物と思っていたこともその一因である。H・Fはデフォーがフィクションを本当の話らしくみせる工夫だとみなした。現在は實在した人物がH・Fのモデルとなっていると考えるのが通説になっている。

H・Fという名前は作品の最後のページになって初めて出てくる。それも誤読を招く一因である。デフォーはもともとフォー(Foré)という姓であったことは知られているが、符号するように、彼の叔父にヘンリー・フォーなる人物がいた。しかも彼はこの作品の語り手と同じく馬具商をしていた。デフォー自身は一六六五年

当時まだ五歳という年齢であったから、自分の体験を思い起こして書いたとは考えにくい。しかも彼の父はペスト発生早々の七月にロンドンから脱出したことが分かっている。当然息子のデフォーも同様だったであろう。となると、実在していた叔父からのちにいろいる話を聞いたとしても不思議ではない。『疫病の年の記録』の話の中心となっている地域はデフォー一家が住んでいたロンドンのシティーのすぐ東側オールドゲイト（Aldgate）周辺であるが、ここに叔父も住んでいた。

「この疫病に対する最善の医療はそれから逃げること」（190）とH・F自身は結論しているように、当時の医療レベルではそれが一番確実な予防であった。あとで書くように王室や上流階級はさつさと逃げた。彼は作品の前半でロンドンから脱出すべきかどうかかなり悩んでいるが、これは多くの市民の悩みでもあった。彼の兄は妻と子供二人の家族持ちでさつさと北のベッドフォードシャーへ逃げている。実際彼自身も脱出しようとしたが、その矢先に風邪を引いたり、召使がにげだしたりしてできなかった。かなり手広くやっている馬具商もひとに任せておけない事情もあった。

悩んだすえに作者デフォーと同様に信仰心が厚いH・Fは聖書にその答えを見つけようとする。『ロビンソン・クルーソー』にも出てくる「聖書占い」（bibliomancy）である。「詩篇」の一文から居残ることを決意する。しかしいま書いたように、それが唯一の理由で居残ったわけではない。またH・Fはペストをすべて天誅、天罰の類と考えることはない。王政復古後の宮廷のひどい悪徳（their crying Vices, 17）が神の怒りに触れたと考えたひとたちもいた。それらのことにさりげなく言及しながらも、基本的には自然災害、当時の言い方で「第二原因」（the second or natural cause）（186）と考えている。つまり神の存在をつねに忘れない男ではあるが、

近代の知性を持った平均的な庶民といえる。ただ彼の特性として旺盛な好奇心があった。つまり彼はジャーナリストイックな人間だった。実在した叔父をモデルにしながら、その精神構造は作者に近い人物、それがH・Fである。

『疫病の年の記録』はH・Fのできるだけ私的な面を抑えた(本文では「私的な臆想は個人的な目的に取っおいてどんなことがあっても公表されないように」(75)とある)ペスト報告であり、状況分析である。彼のペスト体験は個人的ではあってもつねに公的な側面を帯びている。

『疫病の年の記録』はオランダのアムステルダムでペストが一六六三年に発生したという情報から話が始まる。そして次の一節ですぐにロンドンに話が移り、ドルリーレーンあたりに一六六四年一二月発生とある。三ページ目には各教区が毎週公表する「週間死亡報告」(Bills of Mortality)が転記されている。その数値はすべて信用できるわけではない(「週間死亡報告の不確実さ」(183))が、唯一頼れる数値として毎週の死者数とその死因別数が記載される。各教区の数値、その増減はペストの進行状況をはつきり示す。デフォーはデータを利用しながらロンドンにおけるペストの移動を追っている。これもこの作品を信頼させる要因であった。ピープスも『日記』に「週間死亡報告」からの数字を利用しているが、そのまま書くことはしない。

デフォー作品で貸借表などが書かれていることはめずらしくないから、読者が『疫病の年の記録』でそれを見ても驚かない。一六六五年のペストはロンドンのシティーの西側から東側へ広まっている。それを跡付ける数値を利用しながら、H・Fのいる東側の恐怖を書いている。ロンドンは翌年の大火でシティーの四分の三が消失し、都市改造がこの半世紀にかなり進んだ。デフォーが執筆した一七二二年時点の市街図と一六六五年の

それとは当然違っていた。デフォーは、デイクেনズと双壁でロンドンのことをよく知っていたが、この作品では極力シテীরのすぐ外側のみ、六〇年前と違わないところ、彼自身が生まれ育ちよく知っているとこに細かい描写は限定している。デフォーは『疫病の年の記録』でかなり歴史に忠実であろうとしている。H・Fの基本姿勢は、

・ ・ ・ わたしは個々の事例で自分が知っていること、聞いたこと、信じていること、さらに自分の視野に入っただけをここに記している(193)

この基本姿勢は全編に貫かれている。

H・Fの語るベスト情報は三種類に分類できる。第一にH・Fの個人的体験である。たぶん多くの読者にはこの部分が一番面白いだろう。好奇心の強い男であることはしばしば自身の口から「好奇心から」と言っていることでも分かる。彼はかなりの危険を犯してまで、ロンドンの東側を中心に徘徊している。使用人はいるけれども、独身だから身軽な行動が可能である。

H・Fの体験は批評家がフィクションとみなす部分である。デフォー流のヒストリーである。意外に淡々として感情移入を抑えた書き方である。H・Fの目は、ベスト患者はもちろんロンドンのさまざまな側面に注がれる。普段は活況を呈し、雑踏でにぎわう市がつかのまのように描かれる。

・・・自分が通りや広場を歩いていたときのことを書くと、そのときシティーがとても荒涼としていたことを書き留めないわけにはいかない、わたしの住んでいた大通り、ロンドンの通りの中で一番広い通りの一つのことである。・・・シティー内の大通り、レドンホールストリート、ピショップゲイトストリート、コーンヒル、さらに取引所 (the Exchange) まで、通りに草が生えていた、そこかしこに(98)

ドラマティックに書くというのではない。それを期待する読者は裏切られることになる。デフォーよりもっと生々しく、どぎつく悲惨なベスタの状況を書いたものはたくさんある。しかしデフォーは意識的に突き放した書き方をする。例えば、ある母娘だけの家で、一人娘がベスタに罹る。

ベッドに風をあてて、母親は若い娘の服を脱がせ、寝かしつけて、ロウソクの灯りで体を調べ、すぐに彼女の太ももの内側に死のしるし「腺ベスタでは鼠蹊部に黒い斑点が現れる」を見つけた。母親は気持ちを抑えることができず、ロウソクを投げ捨て、とても恐ろしいほどの金切り声をあげた、どんな神経の太いひとでも恐怖心を持つほどの声であった。(55-56)

結局母親も気が狂って数日後に死亡する。「この声はいまでもわたしの耳に残っている」とある。H・Fが実際に体験したのはその悲痛な叫び声である。しかし、このような書き方が逆に読者の印象を強くする。

あるときH・Fは船上に逃げるのも得策かもしれないと、例の好奇心もあつて出かけ、テムズ川の南岸である船頭に会うエピソードでも、ペーソスはあるが淡々としている。その話では家族が全員感染したために監禁

状態におかれ、一人残った船頭が家族の食料をその家先の石の上に置くというものだが、余計な感情移入はさけている。しかしH・Fは同情してお金を与えて、その悲痛さを表している。

一番有名なエピソードは、彼の教区にふつうの墓穴では間に合わずに巨大な穴(the great Pit)が掘られたとき、それを彼自身が見に行く話である。長さ四〇フィート、幅一五から一六フィート、深さ二〇フィートとある。この記事自体が報告書を読む感じである。その穴は当初一ヶ月くらいの死者に対応できるだろうと見られていたが、わずか二週間で一一四体を埋めてほとんど満杯になった。その巨大な穴に死体が四〇〇体くらい埋められたときH・Fは再度見に行く。本来、感染予防のため墓穴に近づくことは禁止されている。それを知っていたながら、出かける。しかも昼は死体に土が被されているのでわざわざ夜、見に行く。入り口で知り合の寺男に「反対されるのを押し切る」。

・・・寺男は・・・わざわざそこへ行く必要はないですよ、ただ好奇心を満たすためだけでしょう、だとすればそんな危険を犯すのはよくないことは分かっているでしょう」と言った。「わたしはどうしても行きたいのだ、それにたぶん、見れば教訓になるかもしれないし、無駄ではないだろうから、と言った。ああ、その善良な男は言う、そういうことで行こうというのなら、どうぞ入りなさい、きつとそれはあんたにはいい説教になるだろう、これまで聞いたなかで最高の説教だね。意味深い「speaking OEDは例文としてこの箇所を引用している」情景ですよ、と彼は言った、それに声が聞こえてくるね、大きな声でわれわれみなに悔い改めるとね、そう言って彼は戸を開けて、入りたければ、さあ入りなさいと言った。



H・Fの好奇心が感染すら恐れずに彼を駆り立てているようにみえるが、一方で彼はペストの報告者として行動している。このペストで生き残ったH・Fの記録はかなり私的な面が薄れている。単なる個人的な体験報告ではなくなっている。

第二の情報はH・F自身の体験ではなく、伝聞や風聞したことである。彼は自分で体験したこと、伝聞、風聞とをはっきり区別し、後者についてはそれとわかるように明示している。ペストにまつわる噂話は十八世紀に入ってもかなり一般に知られていたであろう。それをデフォーは極力事実だったかどうかを留保する形で書いている。例えば、次のエピソードでそれを確認できる。

ある婦人で裕福な市民の妻が不幸にもかわいそうにこのような連中「病んで狂った貧乏人」に殺された。(話が本当ならば)、この男は本当に狂ったようにわめき歌を歌いながら通りをやってきた・・・男が自分に追いつこうとしているので、彼女は振り向いて、男は弱っていたから、うしろへ突き倒した。しかし大変不幸なことに彼女はすぐそばに立っていたから、男は彼女を同じように倒して、自分が上になり、押さえ込んで彼女にキスをした、さらにひどいことにはそうしながら、俺はペスト病みさと言った・・・ (154)

「話が本当ならば」とわざわざ留保している。別のエピソードでは書いたあとに「わたしはそれを事実とは認めない」(149)と云い、

泥酔した笛吹きが墓穴にほかの死体と一緒に投げ込まれそうになる「笛吹き男の話」(87-88)は、当時の人なら誰でも知っている話であったが、この作品ではわざわざH・F自身がこの男を荷車で運んだジョン・ヘイワード(John Hayward)からそれを聞いたとする。(87)しかも一般に流布している笛吹きの話は正確でないと言おう。ヘイワードはデフォアの知人で実在した。わざわざ実在人物まで登場させて正確を期す姿勢を示しているが、この話も伝聞であることには変わりがない。

また家族がすべて死亡して精神的に参って完全に痴呆になり、頭がどんどん体に入り込んで両肩のあいだにうずまるようになってしまった男の話では、「この話の要約しか書けない、細かい点を聞く手立てはなかったから」(116)と書いている。さらに看護婦が患者の顔に濡れた布をかぶせて殺してしまったというつわさがあり、(82) H・Fは本当の話とは思えないという。「こつこつ話には真実より作り話の要素が多い」(83)

デフォアはなぜここまで間接情報であることを断り、ときに否定的に書いているのか。これはさきに書いた「ヒストリー」へのデフォア的こだわりである。『疫病の年の記録』は事実にとだわっている。デフォアはペストにまつわるエピソードをできるだけH・Fの直接体験とそつでないものとを区別するように求めている。

『疫病の年の記録』はさまざまなデータを利用しながら、それをH・Fの個人情報とあわせて書かれたものである。デフォアが利用できた公的資料などからの情報、ペスト関係情報はこの作品のもう一つの側面である。デフォアはそれぞれを積み上げていくことによって一六六五年のペストの全体像を作り上げた。それをH・Fの提供する第三番目の情報として以下にまとめる。このデータ集積による作品構成はJ・ジョイスをはじめ多くの批評家が評価するところである。

当時の医学では、ペスト菌はもちろん、それがどのようにして伝染していくのかまだわかっていなかった。空気感染説、微生物説、接触感染説、さらに天罰説など入り乱れていた。人々もペスト対策として石炭などの火を路上で燃やしたり(287)、香を焚いたり、護符を身につけたり、酢を愛用したり、アルコール類にたよるものもいた。多くの人が本能的に感じていたことは人と接触することが感染の危険を増すと思っていたことで、金銭的にも余裕のある人たちはさっさとロンドンを脱出した。その数は『疫病の年の記録』の情報では二〇万人という。(71)

ペストは一般に「貧者の疫病」(the poor's plague)である。ペスト患者の多くは貧しい人々だった。一六六五年のペストは腺ペストといわれるものであるが、これは菌をもったネズミが伝染させる。そのネズミに生息するノミがひとに伝える。住宅事情や衛生面の悪い家庭ほどペストにかかりやすい。上流社会の人々は彼らがおびえるほど現実に感染する危険は少ない。上流社会の感染危険度は貧しい階層の二分の一以下であった。もちろん不幸にして召使い、下女などから感染する場合はあった。語り手H・Fの説明では「感染は召使いたちによって市民の家に広まる」(72)当時のロンドンの人口約四〇万人のうち七万人がペストで死亡しているから、上流社会の人々がおびえるのは当然であったが、S・ピープスやJ・イーヴリンの有名な日記からは切実な悩みなどが伝わってこない。実際、彼らの身近に死者はでていない。また余裕のあるひとびとはさっさとロンドンを脱出したことはまえに書いた。

ペスト患者は自宅に監禁された。患者が発生するとその家は封鎖され、その家人はたとえ健康な人であっても同様に外に出られなくなった。『疫病の年の記録』ではそれを「プリズン」とも言っている。(88)ペスト患者、さらにはその家族の隔離、監禁と犯罪者の監獄のイメージはM・フーコーの指摘をまつまでもなく当時か

らあった。当然、公的権力による監視、私的権利の束縛などが絡まってくる。

患者の家の封鎖という点は『疫病の年の記録』でしばしば論議される。健康な者と患者を同じ屋根のしたに閉じ込めるのがいいのかどうか。当時、当局から手配された「検査官」(the Examiner)が各戸の感染状況をチェックした。教区内の住宅をチェックしてベストに罹かっていないかどうか調べる臨時の役人である。H・Fも流行最盛期に検査官に任命される。これはH・Fの体験が公的な意味を持つことを意味している。検査官は一般住民からは「ヴィジター」(つまり訪問者、疫病神)と皮肉にもいわれた。患者が出た家の戸口には赤い十字のしるしが張られた。封鎖期間は現在でも検査期間とされる四〇日(quarantine)であった。その家を完全に閉鎖し監視するのがウォッチマンという監視員である。

H・Fは封鎖そのものに疑問をもっていたから、検査官の任命を最初断るが、市長命令で仕方なく二ヶ月のところを三週間だけに短縮してもらって就いている。人道的立場からも問題があるこの封鎖、監禁政策はすでに多くの国で取られていた。

・・・それ「監禁政策」は法のもとで認められていた、それは公益(the public Good)を第一の目的としていた、その施行でもたらされる個々人の権利侵害は公益のため(the public Benefit)の支払いとみなされた。

今日に至るまで全体としてそれが感染防止に寄与したかどうかは疑わしい、いやわたしは寄与したとはいいたくない、・・・確かにすべての感染者がしっかり監禁されれば、健康なひとが彼らに近づくこともないから感染しないだろう。しかし実情は次の通りである、簡単に触れておくと、感染は知らず知らずの

うちに、外面的には感染していないように見える者によって、広まっていて……(152)

……それでこのように家を封鎖することはその目的「感染防止」にはまったく不十分である。実際、個々の封鎖された家庭の悲痛な負担に同等の、あるいはそれに釣り合った公益にもなっていないように思える、そしてこの厳しい規則を守るため公的にわたしがした仕事に関する限りでは、その目的になつてとができない例をしばしば見た。(160)

H・Fはもつと公的なペストハウス(当時ロンドンに二つあったが、不完全な隔離施設でベッド数も足りなかった)を増設すべきだし、健康なものと病人を分けるべきだと書く。(163)デフォーらしい企画が念頭にあつての言説なのだ。『疫病の年の記録』は、いろいろな問題点を「出版する」(publish = 公的にする)ことによつて、ペスト認識を一般に広め、一層効果的な対策を求めるデフォーの戦略上にある。

ペストは静かに伝染していくが、一方で、公的な力がこの感染期間ほど顕著な時期はない。検査官、監視員、女性の検査官(身体検査をする役)、医者、看護婦、など行政が指名したものがしつかりチェックしあう世界である。路上の清掃、死体の敏速な放置など、一つの教区内の協力だけでなく、ロンドン全体が行政当局の指示のもとに動く。これは管理された新しい社会の誕生でもある。デフォーは当局の政策、処置をいくつか留保しつつも適切であつたと賞賛している。暴動が起きなかつたことは慈善活動や当局の監視が行き届いたからだと書く。(94)さらにこの非常時における経済活動、食料供給など、デフォーの目は行き届いている。ペストは単なる個々人の病ではない。『疫病の年の記録』が公的な報告書の色彩を帯びてくるのはこの病の性格からである。

デフォーにとってロンドンはいギリスの心臓部であり、さらに世界の中心でもある。ロンドンがベストという疫病に生き延びていく姿は強烈な魅力だったに違いない。最終的にはこの災禍に立ち向かったロンドン市民、ロンドンそのものへの賛歌となっている。M・シヨンフォーン(Schonhorn)のいうようにこの作品の主人公はロンドンだともいえる。<sup>146</sup>「ロンドンは立派な行政とすばらしい秩序を持つがゆえに世界の諸都市の見本である」(146)官民あげての協力があってこの大疫病は克服できた。それだけに早々に逃げ出した国王など王室への批判は強かった。<sup>147</sup>

一七二〇年代の初めの民心が乱れていた時期に再度疫病の年を想起して、国を立て直すことをデフォーは求めているのだらう。その意味では愛国的な作品でもある。

(注)

使用テキストはペンギン・クラシックス版(2003): *A Journal of the Plague Year*, (Penguin Classics, 2003), 引用のページ数も同版に示す。

- (1) Susan Sontag, *AIDS and Its Metaphors*, Penguin (Harmondsworth, 1990), ch.5.
- (2) Walter Scott, *Lives of the Novelists*, Routledge & Kegan Paul, London, (1968), p.168.
- (3) 当然のことだが、デフォー自身もヒストリーを書いているつもりである。その典型は『嵐』(*The Storm* 一七〇四)で、これはやはり一七〇三年一月にイギリス南部を襲ったサイクロンを各地の被害報告という形でまとめたことである。
- (4) 『疫病の年の記録』次頁論文に詳述。Robert Mayer, *The Reception of A Journal of the Plague Year*, *Journal of English Literary History* (1990), pp. 529-556.
- (5) Nathaniel Hodges, *Loinologist: Or, an Historical Account of the Plague in London in 1665*, quoted in Norton Critical

Edition 1's Journal of the Plague Year(1992), p.214.

- (6) ビーナス(当時は海軍の軍需部糧食課検査主任、のちに海軍本部次官になった)やイーヴリン(さまざまな役職を委任され、のち王璽尚書になった)は当時の政府のお偉方であった。ペストに関することでは、毎週の死者数の増大ぶりを書き、通りをあるくと放置された死体に出くわしたり、棺を運ぶひとたちとすれ違ったり、ついには妻子を郊外へ移住させたり、とペスト伝染の恐怖をこの年の日記に書き記す。しかし一方で、上流社会のパーティに出席し、贅沢な食事をして、かなり優雅な生活が描かれ、さらに役職関係の記事が多い。彼らにとってペストと同様、あるいはそれ以上に役職上のこと、とくに当時継続していたオランダとの交戦(第二次英蘭戦争一六六五—一六六七)が重大な関心事であった。

(7) John Bender, *Imaging the Penitentiary*, University of Chicago Press, (1987), ch. 3.

(8) Manuel Schonhorn, "Defoe's *Journal of the Plague Year*. Topography and Intention," *Review of English Studies*, n. s. 19 (1968), p.397.

- (9) 国王など宮廷はペスト発生早々の六月にオクスフォードに逃げた。そのことには語り手H・F、あるいはデフォーは批判的(22)だった。品性下劣なチャールズ二世への個人的な反発もあるが、頂点に存在する王室がロンドン市民とともにペストと戦う姿勢、また彼らの苦悩に配慮する姿勢に欠けていたからである。ただ王政復古以後ロンドンに活気が出て、経済活動が活発になったという面もデフォーは指摘しているから、王室を全面的に批判しているわけではない。(19-20)デフォーは重要な任務を担うはずの医者が多数田舎へ逃げたことも、責任回避という点で批判している。

(英米文学科 教授)